

氏名（本籍）	ミヤ モト ミ エ 宮元三恵（宮崎県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第169号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位論文等題目	〈作品〉BLISS 〈論文〉「BLISS」知覚をテーマとするコミュニケーションの手法。その手法により創出する空間の存在性。そしてそれらの記述法に関する実践研究

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	六角 鬼 丈
（論文第1副査）	〃	助教授	（ 〃 ）	野 口 昌 夫
（作品第1副査）	〃	教授	（ 〃 ）	益 子 義 弘
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	北川原 温
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	片 山 和 俊
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	黒 川 哲 郎
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	光 井 涉

（論文内容の要旨）

流動的に変化する走馬灯のような現代都市に建築という行為を挿入するにあたって、「どこに、どういった空間が、なぜ存在するのか」という空間への根源的問いかけを起因とする本研究は、その都市に生きる生活者の1人として、私自身の都市との関わりに着目することで進められた。

本研究では、具体的活動によって、人種、文化、空間を繋ぐ「状況」を創出することを目的に、私自身がロンドンとノイス（ドイツ）の都市にそれぞれ3ヶ月間に渡り滞在する中で出会った91人の子どもの「知覚」をテーマにしたワークショップ、ピクニック、そしてそれら一連の活動を地域にフィードバックする展覧会という3つの活動によって研究を進めた。

これは、現代のように目まぐるしく変化する社会においては、そこに内包される個人個人の体験の集積またその個人の辿った軌跡をみることによってであれば、その変化する都市の総体、さらにはその往く先にある建築空間のあり方が見えるのではないかとの考えに基づいたものである。

上記の考えを基に進められた活動を考察する本論文の構成を以下に記述する。

本論文の1章では、研究の起因となる空間への根源的問いかけに基づき、本研究と都市や建築空間との関わりを記述する。我々が生活する「都市」を日々変化する様態としてとらえ、その「都市」に内包される「建築空間」の存在性、さらに我々「個人」と「都市」との関わりについて記述する。その上で、私という「個人」を都市生活者の一人のモデルと扱い、自身が「都市」を生活する中で行なう「個人的営為」を、都市とのコミュニケーション行為という観点から考察することで「都市の現在」を読み解くという本研究の目的を述べる。

2章では「個人的営為」という活動を介し、「流動的に変化する現代都市を読み解く」という目的を踏まえ行なわれた実践活動「BLISS」に至るまでの研究経緯を述べる。「BLISS」を始める動機となった体験を、興味、趣味という側面から紹介し、都市生活者のモデルの一人として扱われる私個人の都市との関わりを「個人的営為」として明確化する。その上で、本研究の導入となった3つの習作「My everyday life」、

「Section(s) : London」、「Nest」を具体例として取り上げ、「定点観測」、「画像の集積」「Cut & Paste」と呼ばれる記録手法、「時間の2次元表現化」、及び「反応の共有」という活動手法によって獲得される表現の意義と可能性を述べる。

3章では、「個人的営為」が知覚という身体への刺激を介して得られる「反応の共有」に基づく活動である「BLISS」へと移行した意義を、大人と子どもに於ける知覚の役割の違いから導きだす。そして、「BLISS」で行なわれた具体的活動を読み解く手掛かりとして、用いられた活動手法と用いられたマテリアルの紹介、及び用いられたマテリアルにそって行なわれる活動を記録する「観撮」という表記法の紹介を、幾つかの具体例を用い行なう。

4章では、ロンドンとノイス（ドイツ）でおこなった活動を時系列にて具体的に紹介することで、前章で記述した手法を実践的に検証する。まず、私自身が都市と関わるなかで行なった「個人的営為」である3つの活動（ワークショップ、ピクニック、フィードバック）の相関関係を、「介入」、「挿入」、「投入」という3つの軸によって捉え、それぞれの活動の目的と活動のストラクチャーを構築する。その後、時間の経過と共に移行した活動とその記録表現相互の展開性を顕かにすることを目的に、それぞれの具体的な活動を時系列に記述する。なお、これら時系列の記録は、単なる活動経過の記録として存在するのではなく、3章で紹介した表現方法と活動手法が相互に影響を与えながら発展したことを視覚的に解説する事例として存在しており、かつ時系列に記録を行なうことで個人と都市との関わりを時間を含んだ経過の中で考察するためのツールとしても存在している。

最後に、現代社会との具体的関わりを経て進められた本活動がきっかけとなって獲得した既存空間の新たな活用法や新たに創出した個人と既存社会の関わりという「状況」を明示し、本研究で用いられた手法や、手法に則り行なわれた活動を「状況をデザインする」為の手法や行為として読み解く。その上で、行為の結果創出した「瞬間的存在性のもとに成り立つ空間」という存在が「都市の現在」を現出するものであり、かつ時間を介して変化する活動の軌跡（様態）が、今後の都市を展望する指針となることを述べる。